

【作品タイトル】10分前の彼女

【著者名】ミツイ マユ

【あらすじ】

10分ごとに記憶がリセットされる彼女を見守る青年。彼は何度も恋を繰り返す。しかし、「記憶管理用」のタイマーに浮かぶのは自分の名前。記憶を失っていたのは彼自身だった。静かに世界が反転する物語。

【特記事項】

「10分」という制限時間をリアルタイムで共有する構成です。セリフの間や沈黙、光の変化で記憶の反転を表現できるショートフィルムとなるよう制作しました。

【文字数】 2486

【本編】

タイマーは、いつも僕のポケットで静かに鳴る。

ある日の1分—

商店街のベンチ。施設の街区にある偽の夕焼けは、毎日ほぼ同じ色で空を塗る。

「ねえ、覚えてる？ 小学校の体育倉庫。あの時のチョークの匂い」

彼女が笑う。僕は頷く。

覚えている。君が縄跳びを忘れて、僕のを貸した。君は三重飛びができた。僕はできなかった。

「へえ、私、そんなにすごかったんだ」

彼女は自分のすごさを、10分おきに初めて聞く。

ある日の2分一

別の日、同じベンチ。飴を半分に割って渡すと、彼女は目を丸くする。

「優しいね」

「優しいよ」

僕は反射的に言って、直後に笑ってしまう。彼女も笑う。

ふたりの笑い声は、静かな広場に溶けてゆく。吸い込んで、次の10分までとどめてくれる。

ある日の3分一

雨の日。街区の雨は屋根の装置が作る音。

「雨って、なんか落ち着く」

「うん」

「でも、どうして落ち着くのかな」

「昔、教室の窓際で、君が落書きしてた。雨粒の形。多分、その時から好きなのかもね」

「私、落書きなんてした？」

「うん。僕のノートに。先生に叱られた」

彼女は目を瞬かせる。「……ごめん」

「ううん、ありがとう」

「ええ？」彼女が笑う。

僕は本当に、あの落書きが好きだった。

ある日の4分一

パン屋の前。焼きたての匂いが街区を満たす。

「ねえ、わたしたちって、どういう関係？」

「同級生。幼なじみ。……友だち」

「ふふ、友だち。いい響き」

隣のガラスに、僕らの並んだ顔が映る。彼女は僕の耳の小さなほくろを見つけるみたいに、横顔を覗き込む。

「でも、私、君のこと、もう少し特別に思ってた気がする」

「うん」

「根拠は、ないけどね」

根拠なんて、10分では根を張れない。けれど芽は、何度でも出る。

ある日の5分一

診療所の前。白衣の人たちが通り過ぎ、時計の針は飾りみたいに動かない。

「ここ、病院？」

「ううん、街。君の街」

「へえ、いいね」

彼女は首からぶら下げたカードをなぞる。名前が書かれたその線は、日に日に太くなる。

「私、ここ好き。安全だし、毎日楽しい」

「うん」

安全は、記憶を奪う代わりに与えられた防波堤。彼女の心も守っている。

ある日の6分一

広場の噴水。子ども用に調整された水流が、決まったリズムで跳ねる。

「ねえ、私の好きなものってなに？」

「みかん。あと、いちご味の飴」

「へえ、覚えておこう」

彼女は手帳を開く。見開きに同じ文字が幾度も書かれている。

『みかん、いちご飴、ベンチの右側が好き、この人は優しい。』

「字、きれいだね」

「そう？ ……明日になっても、同じ字だといいな」

明日。彼女の明日は、10分ごとに新しい。

ある日の7分一

図書コーナー。背表紙は色味をそろえられ、難しい言葉が少ない。

「読んで」

彼女が差し出すのは、たった三行の詩。

『わたしのポケットは 小さくて

思い出は 入らない

だから あなたに あずける』

「誰が書いたの？」

「君」

「私？」

「たぶん、10分前の君」

彼女はふふっと笑う。「センスあるなあ、10分前の私」

ある日の8分一

喫茶店。カップの底に小さな星が刻まれていて、見つけるといいことがあるという設定だ。

「見て、星」

「見えないよ」

「ほら、ここ」

彼女の指先が、僕の手の甲をかすめる。彼女は触れたことを覚えない。けれど、その温度は、僕の皮膚の下に沈んでいく。

「ねえ、もしさ」

「うん」

「もし、私がなにも覚えてなくても、君は私のこと、どう思う？」

「覚えていなくても、君は君だよ」

「ふーん。……そっか」

彼女は窓の外を見る。目が、少し揺れた。

ある日の9分一

ベンチに戻る。人工の風が木の葉を揺らす。

「君を10分のあいだにどんどん好きになるのに、すぐいちばん遠くに行く」

僕が言うと、彼女は首を傾げる。

「でも、戻ってくるたびに、同じ場所に座るんだ」

「案内してくれてるからだよ」

「うん。君自身が選んでる」

彼女は少し頬をふくらませて笑う。「うそ。私、簡単についてっちゃうタイプだもん」

「じゃあ今度は、僕がついて行くよ」

「どこへ？」

「君の好きな方へ」

ある日の残り10分一

10:00

観覧車。1周＝10分。夕焼けがゆっくりと流れる。

「ねえ、降りたら、また乗れる？」

「うん、何度でも」

「じゃあ、降りたら、また乗ろう」

ポケットのタイマーが鳴る。あと10分。

8:57

紙コップの水。彼女の唇が濡れて光る。

「冷たい」

「少し歩こうか」

「うん」

手首の細いゴムで結ぶ。何度目かの合図。

5:03

パン屋の前。いちご飴を渡す。

「私、これ、好き？」

「うん。たぶんね」

「うん、好き」

2:10

観覧車が空を切る。

「ねえ、もし、私が10分でぜんぶ忘れるとしても、君は話してくれる？」

「もちろん」

「どうして？」

「どうしても、君に話したいことがあるから」

「なに？」

「君が好きだってこと」

彼女は目を丸くし、ふっと笑う。

「——ありがとう」

1:05

「名前、もう一度」

僕は言う。彼女は復唱する。

「忘れたくないなあ」

「うん」

「でも、私、たぶん忘れるんだよね」

「うん」

彼女は、笑った。泣きもしないで。

「ね、次からさ、『はじめまして』からはじめよう？」

今までしたことがない会話だ。

「うん。いいよ」

0:29

僕はしゃがみ、視線を合わせる。

「君は、何度でも、ここに戻ってくる」

「うん」

「そのたびに、僕は最初から話す」

「うん」

観覧車の光が、瞳に映る。

0:10

「最後に、お願いしてもいい？」

「なに？」

「“またね”って言って」

「……またね」

0:05

息を飲む音。風が止む。

0:03

まつ毛がふるえる。

0:02

視線が僕の肩をすり抜ける。

0:01

僕は、彼女の名前を呼ぶ。

0:00

世界が、一瞬だけ白くはじける。

……気づけば、ベンチの上。夕焼け。

彼女が、少し泣いていた。

「……どうしたの？」

彼女は、ゆっくり顔を上げ、微笑む。

その笑みが、なぜか胸の奥を刺した。

「はじめまして」

僕は笑い返そうとして、ふとポケットに手を入れる。

タイマーが、静かに光っていた。

画面には僕の名前。

【記録開始：〇〇】

息を止めたまま、顔を上げる。

彼女は微笑んで、小さく言った。

「……またね」

ポケットのタイマーが、再び「10:00」を示す。

ここは、彼女の街で、僕らの10分前を、いつも待っている。